

現職日本語教師研修のための作文教材開発とその制作意図

衣川隆生 沖田弓子

要 旨

本稿では、2005 年度京畿道外国語教育研修院で実施された現職日本語教師研修のための作文教材開発とその制作意図について報告する。まず、教材開発の背景と到達目標の設定について概観する。そして、評価基準、到達目標に到達するための教材構成について説明を加える。最後に教材開発における今後の課題についても検討する。

【キーワード】現職日本語教師研修 作文 作文技能 推敲ストラテジー メタ認知ストラテジー

Development of Japanese Writing Materials for Japanese Language Teachers In-service Training

KINUGAWA Takao, OKITA Yumiko

【Abstract】The International Student Center of the University of Tsukuba has developed writing materials for high-school Japanese teachers in Korea and used them on the in-service training program at the Gyeonggi-do Institute for Foreign Language Education in 2005. In this paper, the authors will first review the background and the purpose of the materials. Secondly, the authors will report on the evaluation criteria and the organization of the materials, and finally discuss some issues for future consideration.

【Keywords】Japanese Language Teachers in-service training, writing, writing skill, revising strategy, meta-cognitive strategy

1. 教材開発の背景と設定目標

今回の研修生は、木田(2004)が指摘するように、日本語学習者としての側面と日本語教師としての側面を併せ持っている。どちらの側面に焦点を置くかによって目標の設定は異なってくる。今回の研修ではこのうち「日本語学習者としての側面」のみに焦点を当て、「文章レベルの作文能力を養成する」という目標を設定することとした。それは、以下に述べる理由からである。

まず、2005年3月に実施された事前インタビューにおいて、教師として求められるのは、文字、文レベルの作文の指導能力であり、「文章レベルの作文指導」を要求されることはほとんどないと述べていたことが第一に挙げられる。次に、韓国で施行されている第7次教育課程(韓国教育部, 1997)の記述では、書く教育の目標として「日常のコミュニケーションをとる上でのやさしい日本語を文字を使って書く」ことを挙げているが、実際の学習方法として「指導は簡単な文を書くことを中心に指導する」としか記されていない。韓国の高校生に対する文字、文レベルの作文指導方法は、ある程度確立されており、3コマという数少ない研修で新たな方法を模索するのは適切ではないと考えられる。そこで、今回の研修では、「作文指導方法」には焦点を当てず、純粋に「日本語学習者としての側面」にのみ焦点をあて、「文章レベルの作文技能」養成に主眼を置くこととした。

具体的には、以下の目標を設定した。

- (ア) 日本語として適切な文章構造、段落構造、書式を利用して文章を書く能力を養成する。
- (イ) 事実文・意見文、比較する・対比する際の表現形式を適切に使う能力を養成する。
- (ウ) 「である体」「連用中止」などの書き言葉の文体を適切に使う能力を養成する。
- (エ) 正書法、表記、文法的に正確な文章を書く能力を養成する。
- (オ) 自分自身の文章を評価し、不適切な部分を修正できる推敲ストラテジーを養成する。
- (カ) 自分自身の文章を自己評価し、能力の向上を図るための目標設定と学習計画の立案ができるメタ認知ストラテジーを養成する。

2. 評価基準

上記、到達目標に準じて、資料1の評価基準を作成した。なお、この評価基準は、試案を作成し、研修院との協議に基づいて訂正を加え、承認を受けたものである。

評価基準は大きく、「言語的内容」、「授業における参加度」、「課題達成度」の三つに分かれる。このうち「言語的内容」が30点で最も配分が高く、「授業における参加度」、「課題達成度」はそれぞれ10点の配点となっている。

「言語的内容」の評価項目は、前述の到達目標(ア)～(エ)に対応して4つに分かれている。第一の項目である「文章構造、段落構造、書式」に関わる項目は、文章のマクロ構造に

関する知識を測定、評価するものである。第二の「表現形式」に関わる項目は、表現意図に合った適切な文型を選択できるかどうかを評価するものであり、第三の項目は「文体」を、第四の項目は「正確さ」を評価するものである。

「授業における参加度」の評価項目は、3つに分けられる。このうち、「積極的に自己評価、他者評価に取り組み問題点の解決を行う」という項目は、特に自己評価を行うモニター能力と学習計画の立案ができるメタ認知ストラテジーの養成を目標とした項目である。

なお、作文に関する評価は、最終テストは行わず、授業における参加度・運用と提出課題の内容で評価することとした。

3. 教材の構成

ここでは、これまで述べてきた教材開発の背景、目標設定などから、具体的にどのような教材を作成したか、その内容を見ていく。

当初は、今回の統合シラバスにおける3つのユニット、すなわちユニット1「変化する日本語」、ユニット2「日本人の特質」、ユニット3「言語行動の韓日比較」の各々に対応させて、作文に関しても、「§1 分類・定義・例示」、「§2 意見を述べる」、「§3 比較する・対比する」の3コマの教材を準備した。

ユニット1「変化する日本語」の中心的なテーマは日本語の変異である。そこで、§1では、読解、聴解で扱った内容に基づいて、日本語や韓国語にはどのような変異があるかを、分類、定義、例示の表現を用いて説明する文章を書くことを目標とした。

「§2 意見を述べる」では、適切な表現形式を用いて意見を述べられるようになることを最終的な目標としている。特に会話で学習した「話し言葉における意見述べ」との文体の差に焦点を当て、書き言葉の特徴が学習できるようなものとした。

「§3 比較する・対比する」でも、会話で学習した内容をまとめた文章にまとめることを目標としている。具体的には、アサヒビールお客様生活文化研究所(2001)が行った『しあわせ意識日韓比較調査』を用い、共通点、相違点を指摘し、調査結果を比較、対比しながら報告する言語活動を取り上げている。

上記の方針で、教材を作成したが、作文の最終授業の前に評価結果を出す必要があるため、最終授業はフィードバックを中心に扱ってほしいとの研修院からの要望に従い、以下のような構成に変更した。

ユニット2 「日本人の特質」

§1 意見を述べる

ユニット3 「言語行動の韓日比較」

§2 比較・対比する

フィードバック

§3 フィードバック

フィードバックの授業においては、課題作文§1、§2を自己評価し、再提出することを目標とした。この活動を通して、不適切な部分を修正する推敲ストラテジーと能力の向上を図るための目標設定と学習計画の立案をするメタ認知ストラテジーを強化することを目指した。具体的には、1)作文の書き方・作文の構造についての信念を内省し議論する、2)自分自身の作文の書き方・構造について自己評価をもう一度行う、3)作文のピア・リーディングを行い、相互評価を行う、4)作文の自己訂正を行うという活動を行うことにした。

4. 各課の構成

ここでは、「§2比較する・対比する」の教材内容を事例として取り上げ、各課の構成について説明を加える。

まず、「目標」「予習」「教室活動」「課題」等をまとめて示したものが資料2である。

「目標」は「1. 比較・対比の文章構造・段落構造・書式を理解する」と、「2. 比較する・対比する際の表現形式を理解する」の2点である。「1.」では、文章全体の大きなフレーム、流れ、典型的な論理展開の習得を目的としている。「2.」では「1.」を実現するために必要な下位レベル、単文単位での適切な日本語表現の学習を目的としている。目標として、この「1. 構成」、「2. 表現」という2点が立てられている点は、「意見を述べる」の教材の場合も同様である。

研修生には、毎回、教材の予習を課すこととした。「本文を読む」がそれに当たる。これは「意見を述べる」の場合でも同様の内容となっている。

次に、「教室活動」「課題」とあるが、詳細は資料3「§2比較する・対比する」の教材例を参照されたい。

教材内容は、次の5つのパートに分かれている。「本文」、「比較・対比の文章構造のまとめ」、「比較・対比・共通点・相違点の表現形式」、「練習」、「課題」である。「」と「」のパートが、上の「目標」の「1. 構成」、「2. 表現」のパートが「2. 表現」の学習に対応している。

まず、第一の「本文」を見てみよう。はじめに、本文読解前の準備段階として、読解の際に研修生がつまづく可能性がある語彙を挙げ、読み方と意味を学習する。まず、挙げられた語彙を、意味のわかるもの、自信のないもの、意味がわからないものに分類させ、研修生自身の知識の有無や不足している点を意識化させる。この分類、自己チェックの過程は、自律的学習を促す活動のひとつとして位置づけられる。分類のあと、自信のないもの、意味のわからないものについては辞書などで調べ、各自の未習語彙を学習しておく。

次に、本文のテーマと、読む際に注意して欲しい点について提示している。テーマの提示によって、研修生はこれから読む文章の内容について予測し、読解に必要なバック・グラウンドの既知情報を活性化し、テーマについてのスキーマを頭の中に構築しつつ、読解の準備の体制ができる。さらに、読む際に注意して欲しい点について提示することにより、文章を読みながら、文章中の骨子となっている重要な論点（上位項目）と、下位項目との識別を行ないやすくさせ、文章の論旨をより正確に読み取ることを助ける。

さらにまた、今回の各技能統合カリキュラムでは、作文の本課を行う前に、研修生は「会話」の授業において、本課の本文でとりあげている『『幸せ意識』日韓比較』の調査結果について、すでに学習をしているというカリキュラム構成となっているため、ここでの本文理解についてのハードルは、より一層低いものになっている。以上のように、様々な観点から本文読解が正しく行われるよう配慮がなされている。

本文本体には、2つのタスクがある。一つ目のタスクでは、6つの各段落に何が書かれているかを明らかにし、各段落の役割と、この文章全体の「話題の紹介 疑問点の紹介 調査の紹介 調査の概要の紹介 共通点 相違点 まとめ」という流れを明確にし、文章構造の形式を学習する。二つ目のタスクでは、本文の内容面に注目させ、日本人と韓国人の幸せ意識の比較の表を作成することにより、「比較・対比」の文章としてとりあげるべき適切な論点とはどのようなものかを学習する。

第二のパートは「 ．比較・対比の文章構造のまとめ」である。

ここでは、「 ．本文」の中のタスクで学習した文章構造を、「A．序論（前文）」、「B．本論（調査概要）」、「C．本論（比較する・対比する）」、「D．結論」の4つのカテゴリーにまとめ、本文の文章構造をさらに大きく捉えて提示している。このことにより、序論（話題の提示・導入）

本論（調査概要とその結果） 結論（考察）という論理的文章に求められる最も一般性の高い展開パターンを習得することができる。

またさらに、各カテゴリーに、どのような内容・情報を盛り込むべきかを示すとともに、各々、そこで使用される日本語の表現形式についても提示している。この中で特に、「B．本論（調査概要）」は、図表や調査の結果を紹介、考察をする文章で、研修生の誤りとして、とりあげた図表、調査の基本情報を十分に書き入れることができないものが多い中で、何が必要な情報かを示すことは、非常に重要であると思われる。

第三、四は、「比較・対比・共通点・相違点の表現形式」とその「練習」である。

この と のパートでは、本論の中でも最も重要な論点となる調査結果を述べる部分、「比較・対比・共通点・相違点」について、その日本語の表現形式の典型的なものを学習する。「比較・対比」の項目では、「2つの間に差がある場合」だけでなく、「差がない場合」「3つ以上の場合」なども取り上げた。次の「練習」では、「酒を飲む『場所』『相手』『状況』」についての日韓の調査結果を示す図表を見て、そこからわかることを、 で学習した表現形式を実際に使い、文

で表現する練習をする。

この練習で使う図表もまた、本文のパートと同様、「会話」の授業においてすでに取り扱っている『『幸せ意識』日韓比較』の調査結果の一部となっているものであり、研修生が話題へのアプローチがしやすく、調査結果の読み取りの負担ができるだけ少なくなるよう配慮され、表現形式の練習が効果的に行われるようになっている。また、「練習」のタスクの2)では、単に相違点やその差といった事実を目を向け表現するだけでなく、「その結果からどんなことがわかるか」という問いを課し、データの読み取りからさらに一步踏み込んで、文章の結論部となるディスカッション(考察)部分をも考えさせ、導かれるようタスクが構成されている。

最後は「課題」である。

はじめに述べたように、この「比較する・対比する」は、今回の統合シラバスのうちのユニット3「言語行動の韓日比較」の作文部分に当たるものとなっているので、課題は、ユニット3の枠組みに沿って、インターネットで日本と韓国の意識比較調査などの調査結果を検索し、その結果について報告する文章を書くというものである。

まず、文章の基本的制限として、字数(800字)、文体(である体)のほかに、自分とは違う調査を選んだ人を「読み手」として想定するというものが設定されている。これは、作文を書いた後にペアとなってお互いの作文を読み合うという活動につなげるためのもので、読み合う時のインフォメーション・ギャップが、できるだけ大きくなるように配慮した結果である。

次にここでは、作文提出前に自己評価を行うためのポイントが列挙されている。ポイントは本課で学習した、段落について、また「序論-本論-結論」という文章全体の構成が整っているか、さらに各部分で述べるべき情報が正しく十分に盛り込まれているかなどである。研修生はこの評価ポイントに照らし、自分の作文をチェックすることが求められる。この課題は前述した本研修の到達目標(オ)、(カ)に相当する「推敲ストラテジーの養成」及び「メタ認知ストラテジーの養成」を狙いとしたものである。

以上、作文の教材内容について「比較する・対比する」1コマ分を取り上げ述べてきたが、もう一方の「意見を述べる」に関しても教材の内容・構成はほぼ同じである。すなわち、意見文の文章構造の理解と、事実文、意見文における日本語の表現形式の理解を目標とし、本文によって文章の論理展開の典型例を提示、各部分の論点、表現を学習、さらに単文レベルの表現を学習し、実際に単作文により練習、そして課題の提示へという構成である。

5. 今後の課題

これまで述べてきた方針で、教材を作成し、1ヶ月の研修を実施した。研修内容の考察については稿を改めて検討を加えるが、ここでは、今後検討すべき課題について記すことにする。

第一に、まとまった量の日本語の文章を書くという経験がほとんどの研修生にとって初めてであったことが挙げられる。今回目標として設定した文章構造、段落構造、書式について全く未知

であっただけではなく、話し言葉と書き言葉の文体の差についてもほとんど知識を有していなかった。そのため、正確さだけではなく、文章のマクロ構造、文体の差までに意識を払いながら文章を書くという作業は非常に負担の多いものであった。今後は、これらの負担を軽減する方向でカリキュラム、教材を検討する必要がある。

第二に、作文教材の内容を会話教材と関連づけて作成したことが課題として挙げられる。会話教材の報告でも言及しているが、会話は内容が多く研修においては教材の半分のユニット2の途中までしか終わることができなかった。そのため「ユニット3 言語行動の韓日比較」の教材として作成した「§2 比較・対比する」を使用することができなかった。今回の研修は、教材作成者、授業担当者にとっても初めての経験であり、対象となる研修生の能力、知識について把握しきれていなかったことがこのような課題が生じた最大の要因である。研修においては当初作成した「§1 分類・定義・例示」をコピーし配布することで対応したが、今後は教材で取り扱う内容を整理し、適正化することが求められる。

これらの問題点の解決を図りつつ、次年度においては、より統一性のとれた適正な教材を作成することが求められる。

参考資料

アカデミック・ジャパニーズ研究会(編著)(2001)『大学・大学院留学生の日本語 読解編』アルク
アサヒビールお客様生活文化研究所(2001)『しあわせ意識日韓比較調査』

http://www.asahibeer.co.jp/kyakukuen/report_002/

佐藤喜久雄(監修)『国際化・情報化社会へ向けての表現技術 - 「伝える」「考える」ための演習ノート』創拓社：58-60

佐藤政光・加納千恵子・田辺和子・西村よしみ(1986)『実践にほんごの作文』凡人社：52-54

二通信子・佐藤不二子(2000)『留学生のための論理的な文章の書き方』スリーエーネットワーク

引用文献

韓国教育部(1997)「外国語科教育課程()」『第7次教育課程教育部告示第1997-15号[別冊14]』

韓国教育部

木田 真理(2004)「外国人日本語教師研修における文法授業のあり方－文法シラバス整備に向けて－」『日本語国際センター紀要』14：51-68

国際交流基金日本語国際センター(2002)『外国語科 教育課程()日本語版』国際交流基金

資料 1

評価項目 (2005)

項目: 作文

評価者: 衣川隆生

	点数	使用言語領域
言語的内容	21-30	<ul style="list-style-type: none"> 日本語として適切な文章構造、段落構造、書式を利用して文章を書くことができる。 事実文・意見文、比較する・対比する際の表現形式を適切に使うことができる。 「である体」「連用中止」などの書き言葉の文体を適切に使うことができる。 正書法、表記、文法的に正確な文章を書くことができる。
	11-20	<ul style="list-style-type: none"> 日本語の文章構造、段落構造、書式を意識して文章を書くことができるが、適切さに欠ける部分がある。 事実文・意見文、比較する・対比する際の表現形式を意識して使うことができるが、適切さに欠ける部分がある。 「である体」「連用中止」などの書き言葉の文体の使い方に適切さが欠ける部分がある。 意味理解に影響しないが、正書法、表記、文法的に不正確な部分が見られる。
	0-10	<ul style="list-style-type: none"> 適切に日本語の文章構造、段落構造、書式を利用して文章を書くことができない。 事実文・意見文、比較する・対比する際の表現形式を適切に使うことができない。 「である体」「連用中止」などの書き言葉の文体の使い方が不適切である。 正書法、表記、文法に不正確な部分が多く、意味理解に影響を与えることもある。
	Total in this section: 30	
授業における参加度	8-10	<ul style="list-style-type: none"> ペアワーク、グループワークの学習活動に積極的に取り組む。 議論に積極的に参加し自主的に質問、発言を行う。 積極的に自己評価、他者評価に取り組み問題点の解決を行う。
	4-7	<ul style="list-style-type: none"> ペアワーク、グループワークの学習活動への取り組みに積極性に欠ける部分が見られる。 議論に参加し質問・発言を行うが、積極性に欠ける部分が見られる。 自己評価、他者評価に取り組むが、積極性に欠ける部分が見られる。
	0-3	<ul style="list-style-type: none"> ペアワーク、グループワークの学習活動への取り組みに消極的である。 指名されれば議論に参加し質問・発言を行うが、消極的である。 自己評価、他者評価に取り組むが、消極的である。
	Total in this section: 10	
課題達成度	8-10	<ul style="list-style-type: none"> 与えられた予習課題、課題を完璧に行う。 指示された提出課題を完全に提出する。
	4-7	<ul style="list-style-type: none"> 与えられた予習課題、課題を時々行う。 指示された提出課題を時々提出する。
	0-3	<ul style="list-style-type: none"> 与えられた予習課題、課題を行わない。 指示された提出課題を提出しない。
Total in this section: 10		
Total of all sections: 50		

注意: 作文は最終テストは行わない。授業における参加度・運用と提出課題の内容で評価する。

資料2

§ 2 比較する・対比する

《目標》

1	比較・対比の文章構造・段落構造・書式を理解する
2	比較する・対比する際の表現形式を理解する

《予習》

1	「 . 本文」を読む	p.26-27
---	------------	---------

《教室活動》

1	「 § 2 意見を述べる」のフィードバック	15 分
2	「 . 本文」 予習確認	15 分
3	「 . 比較・対比の文章構造のまとめ」	15 分
4	「 . 比較・対比・共通点・相違点の表現形式」	15 分
5	「 . 練習」	15 分
6	「 . 課題」話し合い まとめ」	15 分

《課題》

1	課題作文を書く
2	課題作文を自己評価し、提出する。

資料 3

. 本文

1. 語彙チェック

下の言葉の読み方を確認してください。意味が分かるものには、自信がないものには、意味が分からないものには×をつけてください。分からないものは、辞書で調べましょう。

共同開催(きょうどうかいさい)	疑問(ぎもん)	在住する(ざいじゅう-する)
角度(かくど)	対象(たいしょう)	追求する(ついきゅう-する)
必要不可欠な(ひつようふかけつ-な)		結びつける(むす-びつける)
誇り(ほこり)	明確な(めいかく-な)	

2. 次の文章は「日本人と韓国人の『幸せ意識』」という調査結果の報告です。日本人と韓国人の幸せ意識にはどのような共通点と相違点があるのかに注意して読んでください。

3. 下の文章を読んで、質問に答えてください。

ほんの 10 年ほど前まで、韓国は日本人にとって「近くて遠い国」と言われる国であった。しかし、2002 年のワールドカップ共同開催や最近の「韓流」ブームによって、以前より韓国を近く感じるようになった日本人も多い。インターネットでも「『近くて遠い国』から『近くて近い国』」と韓国を紹介するページも多く見られる。では、本当に日本と韓国は「近くて近い国」になったのであろうか。ここでは「日本人と韓国人の『幸せ意識』」という調査結果を見ながらこの疑問について考えてみたい。

この調査は、日本、韓国に在住する 13 歳から 69 歳までの男女 3,000 人を対象に、2001 年にアサヒビールによって行われたもので、現代の「しあわせ」のありかたを様々な角度から追求し、これからの社会に求められる新しい「しあわせ観」を探すことを目的としている。調査項目は、「幸せのの要素として必要不可欠なもの」「幸せを感じる場所」「生活に満足しているか」など 11 項目であった。ここでは、「幸せのの要素として必要不可欠なもの」の結果について取り上げたい。

まず、「幸せの要素として必要不可欠なものは何ですか」という質問に対する答えを見ると、日本人も韓国人も「健康」「家族」「愛情」が必要不可欠という点では変わらない。例えば「家族の健康」「自分の健康」が大切だという人は、韓国でも日本でも80%以上いる。このように、幸せに対する基本イメージは共通点が多い。

しかし、「地球環境の保全」、「世界平和の実現と維持」という項目を選んだ人を比べると、日本人の方が韓国人より約20%も高く、日本人は地球環境や世界平和を幸せに結びつけていると考えられる。

その一方で、韓国人が日本人より「幸せに必要な不可欠なもの」としてとらえている点は、「自分への自信や誇り」、「明確な人生目標」であり、自分自身を信じて生きることが幸せに結びつくという考えが、日本人よりも韓国人の方が強いこともわかる。

このように、幸せ意識から日本人と韓国人を見てみると、基本的な部分では共通点が多いが、その他の部分ではまだまだ考え方の差もあることもわかる。

1) この文章は6つの段落に分けることができます。それぞれ段落では何が書かれていますか。

- | | |
|----------|-------------|
| 第1段落 () | a. 話題の紹介 |
| 第2段落 () | b. 疑問点の紹介 |
| 第3段落 () | c. 調査の紹介 |
| 第4段落 () | d. 調査の概要の紹介 |
| 第5段落 () | e. 相違点 |
| 第6段落 () | f. 共通点 |
| | g. まとめ |

2) 文章の内容から、日本人と韓国人の幸せ意識の比較の表を作ってください。

共通点		
相違点	日本人	韓国人

．比較・対比の文章構造のまとめ

A．序論（前文）

序論では、話題、疑問点、どんな調査を紹介するかを述べる

- ・話題

～ている・～と言われている・～が問題になっている

- ・疑問

（疑問詞）～のだろうか／のであろうか。

本当に～のだろうか／のであろうか

- ・調査の紹介

そこで、今日は～についての調査を紹介したいと思う。

～は、調査を行った。今日はこの調査について紹介したいと考える。

B．本論（調査概要）

- ・調査主体

（主体）が（調査）を行った／（主体）によって（調査）が行われた

（主体）による調査である

- ・調査時期（いつ）

（時期）に行った／行われた

（時期）の調査である（名詞修飾・Noun modify）

- ・調査対象（だれに）

（対象）に対して／（対象）を対象として

（対象）に対する調査である（名詞修飾・Noun modify）

調査目的

～ことを目的としている

（目的）ために

（目的）ための調査である

- ・調査項目（Item）

調査項目は、A,B,C～の5つであった。ここでは、A,Bの結果について取り上げたい。

（中略）

. 比較・対比・共通点・相違点の表現形式

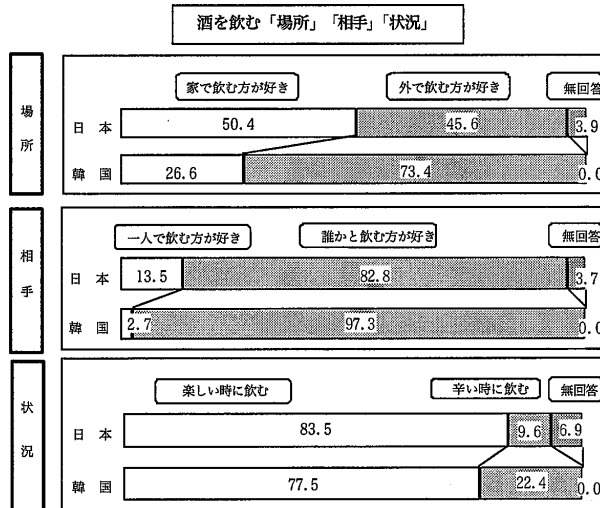
A . < 比較・対比 >

ひかくこうもく 比較項目	AとBを		ひかく 比較すると	
			くら 比べると	
2つの間に差がない場合				
<u> A </u> でも	<u> B </u>	と同じように どうよう と同様に	<u> </u>	

(中略)

・練習

下の図を見て、日本と韓国との共通点、相違点を述べる文を作ってください。



- 1) どんな共通点がありますか。
- 2) どこに相違点がありますか。どのぐらい差がありますか。その結果からどんなことがわかりますか。

アサヒビールお客様生活文化研究所(2001)『しあわせ意識日韓比較調査』

http://www.asahibeer.co.jp/kyakuken/report_002/より

・課題

インターネットで日本と韓国の意識比較調査などの調査結果を検索してみましょう。そしてその結果について報告する文章を書いてください。

読み手：クラスメート(クラスメートの中から一人自分の文章を読んでもらう人を想定ください。読む人を決めるときには、自分とは違う調査を選んだ人にしてください。)

字数：800字

文体：である体

いくつかの節に分けるのではなく、一つのまとまった文章として書く。正書法に従うこと。提出前に、下の項目の自己評価を行ってください。

- ・あなたの作文は、いくつかの段落から構成されていますか。段落の書式が守られていますか。
- ・序論、結論がありますか。
- ・序論で、話題、疑問点、どんな調査を紹介するかを述べていますか。
- ・調査概要で、1) 調査主体、2) 調査時期、3) 調査対象、4) 調査目的、5) 調査項目を述べていますか
- ・本論では、一つの段落では一つの項目(共通点・相違点)だけを紹介していますか。
- ・結果から何がわかるかを述べていますか。
- ・結論には、結果のまとめ・サマリーがありますか。